

假牌与光碟

更年期の本態

人の生涯の節目に、ラムされたスケジュールどおりに起ることがあります。あとけない女の子が、『私は女性』と言い始めたのは十一、三歳を過ぎてからと思いますが、その節目になるのは初潮でしょう。他方、四十歳代後半から五十歳代前半にかけて女性ホルモンの分泌量は徐々に減少し閉経を迎えます。この時期が更年期で、このプロセスは健全な女性では必ずスケジュールどおりに運ばれます。

ところで更年期に、精神状態が不安定になつたり、のぼせ、熱感、めまい、耳鳴り、冷え性、肩凝り、多汗、偏頭痛、動悸、胃腸障害、腫炎、抑鬱、不安感など、いわゆる更年期障害のためには、自律神経機能と密接に関連しているホルモンの平衡状態のバランスが失われたため、自

次新しい環境に馴染み平衡状態を回復しますので、これらの症状は自然に消失します。そんなこともあってか、学生時代に老教授から更年期とは台風みたいなもの、と教わりました。いまにして思えば老教授の実体験が言わしめたものかも知れませんが、当たり散らされても頭を低くして決して逆らってはいけない、といわれたことを覚えています。

女性ホルモン補充療法

更年期障害は台風のようなもので必ず治る、といつても、出来るなら苦しみから逃れたいと思うのは無理からぬことです。その本態は前述したように女性ホルモンの減少ですので、これを補う女性ホルモン補充療法で良くなるといわれると、人は老いるということを忘れて、症状をなくす道を選びたくなるのは人情です。見方によつては、生理性に減少した女性ホルモンを

乳腺腫脹などだけでなく、子宮内膜ガンや血栓症に罹病する頻度を増すという副作用があります。それ故、我慢すれば何れ終わる症状をとるために、重い副作用を起す恐れのある女性ホルモンを使うのは得策でない、と反対する医師もいます。ところが最近、女性ホルモン補充療法は更年期の不定愁訴を治すというようなちやちなものではなく、骨粗鬆症を治療する

更年期と骨粗鬆症

—女性ホルモン補充療法の是非—

サナモア光線協会
サナモア由中央診療所

医学博士 宇都宮 光明

骨粗鬆症が更年期に多少と進むことは医学的に実証されていますので、女性ホルモン補充療法は科学的かつ合理的な治療法である、と支持派は主張します。しかし病気でもないのでこのまま不自然な治療をしなければならないほど人の骨が脆いはず。

更年期障害が特にひどかった人でも更年期を越えれば元気になるよう、骨粗鬆症の進行にもブレーキがかかりますが、ここまで骨の粗鬆化は三条件を守ればたいしたことはありません。問題は七十歳を過ぎる頃から生理性に三条件を満たすことが難しくなり、再び骨粗鬆症が急速に進行し、これが寝たきりにつながる骨折を起こす真の原因になるのです。これを防ぐには三条件を満たす努力を最大限ににするしかありませんが、こそが自然の理にも適うのです。

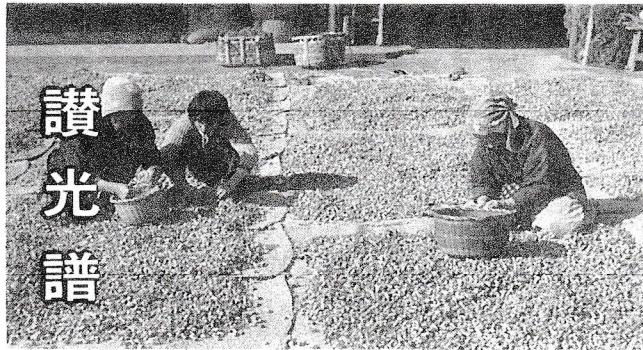
(2) カルシウムを出来るだけ摂取すること。
飽食の時代とやらでダイエツトばやりだが、カルシウムは忘れては損する。
(3) 適度な運動を続けること。
バス停の一つ二つは歩き、電車で目の色をかえて席をとらない(長距離は除く)。
この三条件が不可欠で、すべてに優先します。

という大義名分をひけらかして市民権を主張するようになりました。その上、薬の使い方も手くなり副作用も大幅に減ったと病院によつては更年期外来まで設けて熱心に勧誘していますが、治療を中止したときの急激な骨量減少が最大の未解決な問題点として残っています。

はありません。
老いても丈夫な骨を保つためには、女性ホルモンに頼るよりも化骨を促す自然の摂理に従うべきです。それには、(1) 年間を通してビタミンDを確保するため光線を浴びること(冬が大切)。
光線の大恩を忘れるようなら、骨がぼろぼろになつての当惑

秋の庭先

宇都宮義真撮影

讀
光
譜

原因がはつきりせず、確実な治療法もなく、静かにやって来て、人の命を奪うガンに人々が恐れおののくのは無理もない。

日本癌学会初代会長の長与又郎氏、ガンセンター初代総長の田崎勇三氏、国立予防衛生研究所所長の小島三郎氏など、わが国の鉢々たるガンの権威者もガンで死亡した。未だにガン治療の壁はそれほどまでに厚いのである。

現在、ガンの主な治療法は、手術療法、放射線療法、化学療法の三つに大別される。これらの治療法の中でよく知られているのが手術療法であり、転移のでは術後の五年生存率も高く治癒も期待できるが、既に転移してしまった進行ガンでは多くは数年以内に再発し、死と直面する恐ろしい病気に変身する。それ故、しばしば手術に他の療法が併用されて用いられているが、治療成績はガン・イコール・死程遠く、今日に至るも解決の曙光を見ないのが実情である。

ガンの免疫療法に関する研究

国立ガンセンターでは、キノ

現代の恐怖・ガン

治療法もなく、静かにやって来て、人の命を奪うガンに人々が恐れおののくのは無理もない。

日本癌学会初代会長の長与又郎氏、ガンセンター初代総長の田崎勇三氏、国立予防衛生研究所所長の小島三郎氏など、わが国の鉢々たるガンの権威者もガンで死亡した。未だにガン治療の壁はそれほどまでに厚いのである。

現在、ガンの主な治療法は、手術療法、放射線療法、化学療法の三つに大別される。これらの治療法の中でよく知られているのが手術療法であり、転移のでは術後の五年生存率も高く治癒も期待できるが、既に転移してしまった進行ガンでは多くは数年以内に再発し、死と直面する恐ろしい病気に変身する。それ故、しばしば手術に他の療法が併用されて用いられているが、治療成績はガン・イコール・死程遠く、今日に至るも解決の曙光を見ないのが実情である。

血液の力

反面、そもそもガンそのものにならない人がいる。進行ガンで絶望的と思われていたのに、医師の常識に反して、ガンを克服してしまった人がいる。これ

は何故なのか。

最近、健康な人の血液にはガン細胞を溶かす力があるが、ガン患者の血液はない(フロインド・カメネル癌反応:Freund-Kaemmer's cancer reaction)ことが判明した。つまり各人の血液の力が、ガンになるからないかを左右し、いわゆるガンの自然治癒にも関係する、というのである。この事実は、ガンの治療法には直接ガンを攻撃する方法だけでなく、間接的にガンに対する自己防衛機能、言いかえれば抵抗力を体につけて

ガン細胞を自然に解消する方法もあることを示している。そうすると前に述べたガンにかかるない人とは、ガンにかかるが、知らぬ間に治ってしまった人な

ガンにも免疫

宇都宮 義真

これから抽出した多糖類をガンを移植した二十日鼠に投与した結果、ガンの成長は次第に止まり、

結

果

と報告している。

サナモアの治験例

進行ガンが不治の病として扱われていることはご存じの通りだが、死を宣告された進行ガンの患者が、サナモアの照射で疼痛を忘れたようになり、半年乃至数年間以上生き延びた例はよく経験する。

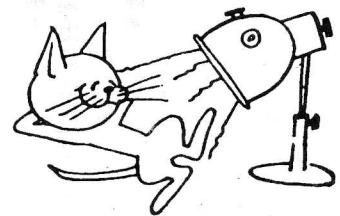
現在、岡山県吉備町に九十五歳で健在であるN女史も、大戦中に岡山医大病院で手遅れの直腸ガンと診断され、手術もできず、やむなくサナモア照射を試みた人である。果たしてガンが治ったのかどうかは分からぬが、とにかくその後三十余年間元気に暮らしておられる。

ガンの免疫療法の研究は緒についたばかりで、評価するにはもう少し待たなければならぬ。而して、これまでにサナモアで経験したガンに対する治療法の一つになるものと思われる。アで経験したガンに対する治療効果の一端でも解明されることとして認知できず、したがってを期待したい。

「健康と光線」

昭和40年11月5日発行
—ガンにも免疫—を引用した。

☆ 腦梗塞



— 治 驗 例 報 告 —

向けない。右手は動きますか、と尋ねると、動く、という。動

かして、というと左手を動かす。右手を動かして、というと、さつきまで動いていた、という。

ABカーボンで足裏を照射する。
10分もしないうちに体をもぞもぞ動かしてじっとしていいない。
私は何処も悪くないのでから帰る、
と言い張る。付き添いに、

一週間の間、ABカーボンで足裏、足首、膝に各10分、本人が

嫌がるなら寝込んだ時にでも照射するよう指示する。五日後には電話があり、昨日から静かにかけさせる、という。一両日は同

じようにして、その後、腰、背
腹、頭部と少しづつ範囲を広げ
てゆくよう指示する。しかし頭
部の照射は、気分が悪くなる、
といって最初は嫌がった。

★C型肝炎

症例 53歳 女性

欲不振、不眠、耳鳴り、めまい、冷え性などさまざまな症状があり、病院ではC型肝炎と診断されて悩んでいた折りに、光線療

療法を勧められ、本年の一月に来院した。
療法経過 カーボンはA A、A B、B Dなどを組み合わせ二灯

間は、側臥位で右上腹部20分、足裏15分、下腹部5分、後頭部5分、肛門10分、顔5分、胸5分、腰10分、膝10分、次いで仰臥位で何れも左右から耳10分、胸5分、喉10分、腹10分、膝5分である。

おりハビリにも意欲的になり、
現在は週に一度、だがリハビリセ
ンターに行き、回復への経過は
順調である。

なくなり、ADまたはBDでそれぞれ10分ないし20分照射、足裏、足首、膝、腹、腰、背はAで各10分照射するようにした。

二ヶ月過ぎた頃から、右手で箸を使って食べ物を口に運んだり、湯のみ茶碗を持ち上げるようになり、右の手足の冷えも次第に軽くなった。三ヶ月後には一人でトイレで用が足せるようになり、目に見えて機嫌が良くなつた。四ヶ月余りして、足の運びは幾分覚束なくよろけることもあるが、近くのショッピングストアに行くのを楽しみにするようになり、久振りに家族の笑い声が聞かれるようになつた。な

☆肺炎の疑い

症例 69歳 女性
症状 友人から痩せたといわれ、
微熱もあつたので、病院で検査
を受けた結果、右の下肺野に異
常陰影を認めた。そのため精密
検査に平行して抗生物質の投与
を受けたが、本例は以前から光

療法経過　カーボンは差し当た
線療法の愛好者で治療法を相談
してきた。

サナモアカーボンの 類似品にご注意下さい。

た著書「光線療法学」とともども愛用者各位の御信頼を頂戴する所存であります。全国津々浦々まで高い評価を受けておりますことは、皆様よくご存知の通りであります。

ところが他社製カーボンに「光線療法学」をセットしたものが、サナモア A B C D と効果が同じという根も葉もないうたい文句で互換表を添付して販売している業者がいます。もとより、このような道理にもとる行為をする者が何時か世にもいますが、当研究所としては他社製カーボンを使用した場合の効果について一切の責任はもてませんので、異々ご注意下さい。

(サナモアカーボンには、製造元ビデン株式会社の商標 B.M. のマークが必ずついてます)

月には、顔色も良くなったり、耳鳴りたり、めまいもしなくなった。なお二月と五月に病院で調べた肝機能検査(GOT、GPTなど)の結果は良くなっていた、と喜んでいた。

現在は週に三回の当院での治療に加え、自宅でも治療を続けている。

川崎市 東京光線治療院
海渡 一二三氏報告
TEL〇四四一七二二一五〇六七

病院の検査では肺の異常な陰影もなくなり、癌の心配もないとのことで安心しました。光線をかけたせいで体の調子がとても良いので、これからも毎日照射します。またお世話になると思いますが、本当に有難うございました」とお礼の電話があった。

春日市 育美健康光線療研
前田 ミサ氏報生

免疫応答を調整する光線療法 その2

—免疫に関わる機構の多様性—

サナモア光線協会 医学博士 宇都宮 明光

抗原に反応する仕組み

前回、免疫系は体内にあるものが自己か非自己かを判別する、と述べましたが、これに関係する抗原を主要組織適合複合抗原(MHC)と呼びます。免疫系は自己のMHCと異なるものを非自己、すなわち抗原として認識し、この抗原と厳密に1対1の対応性を有する抗体をつくります。この免疫の特異性を特徴づける反応は、これまでに出会ったことがない抗原も含めて無数にある抗原に対しても、無数の抗体をつくる機構があることを示しています。

この無数の抗体産生機構を如何にして説明するか、この難問に答える唯一の学説とされるのが、バーネットが一九五七

年に提唱したクローリン選択説です。クローリンとは、一個の免疫適格細胞が抗原刺激によって分裂増殖した全く同じ細胞の集団のことですが、次にクローリン選択説の要点を記しておきます。

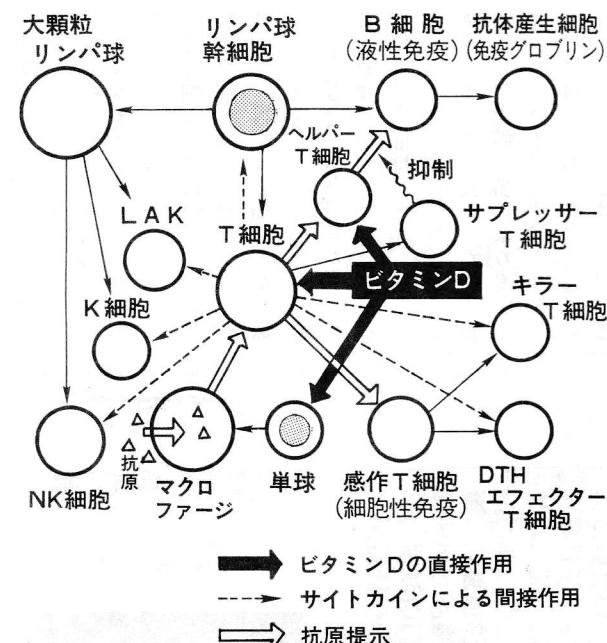
(1) 胎生期に無数の抗原に対し特異的に反応する抗体を作られる。

(2) 抗原に遭遇すると一つの免疫適格細胞が反応してクローリンを形成し、その抗原に対する抗体を産生する(これを1細胞1抗体説という)。

(3) 再度の抗原の侵襲に対し、より速やかにより効果的に反応する(ブースター効果という)のは、いったん抗原刺激で増殖したクローリンが記憶細胞として働くためである。

(4) 自己のMHCを抗原として認識しないのは、胎生期に自己のMHCと反応するクローリンが除去されるからで、これを禁止クローリンと呼ぶ。(自己免疫疾患はこの機構の障害で起きる。)

端的にいって、この説には今まで多くの論理的飛躍がありましたが、無数の抗原に対し無数の特異性抗体をつくる機構が私た



免疫系に及ぼすビタミンDとサイトカインの影響

年に提唱したクローリン選択説です。クローリンとは、一個の免疫適格細胞が抗原刺激によって分裂増殖した全く同じ細胞の集団のことですが、次にクローリン選択説の要点を記しておきます。

ビタミンDと免疫系

ちにあることは確かです。その詳細については未だ不明の点があります。

なおビタミンDによって吸収の直接作用とビタミンDが產生を促すサイトカインが関係する間接作用について、免疫を担当する細胞の分化と相互作用の概要と合せて図に示しました。

図に示した免疫適格細胞はそれぞれに実に複雑な正と負の制御機構があつて、車の両輪のようにバランスよくホメオスター

免疫に関する知識が格段に深まつたのは、リンパ球が種々の特異的な免疫応答に関わる免疫系

その詳細については未だ不明の点があります。されにも属さない大顆粒リンパ球(ナル細胞ともいう)に大別できることが判明してからです。このうち特異的な免疫応答には、骨吸収を促して細胞内のカルシウム濃度を上昇させ、その機能を阻害しますので、免疫機能を正常に作動させる上で著しい不利益をもたらします。

異なる機能を持つ細胞群、すなわちT細胞、B細胞、そのいずれにも属さない大顆粒リンパ球(ナル細胞ともいう)に大別できること

ます。

このうち特異的な免疫応答には、B細胞から分化し免疫グロブリンを産生する抗体産生細胞(プラズマ細胞)、B細胞の働きを補助するT細胞から分化したヘルパーT細胞とB細胞の過剰な反応を抑制するサブレッサーT細胞、同じくT細胞から分化するキラーT細胞(細胞傷害型T細胞)とDTHエフェクタータンパク(サイトカイン産生型T細胞)、大顆粒リンパ球に属し抗体と結合した標的細胞を傷害するK細胞とT細胞が産生するインターロイキン2によって腫瘍細胞を傷害するようになるLAKなどがあります。

抗体産生細胞が産生する免疫グロブリンはIgA、IgD、IgE、IgG、IgM、の五つのクラスに大別されますが、その働きはさまざまです。IgAは粘膜上に分泌され(分泌型IgA)侵入しようとする微生物や異物を阻止する局所免疫に有用で、また母乳に比較的の濃度に含まれるため母乳栄養児

